関東の後期大型前方後円墳

白　石　太一郎

はじめに
1. 関東地方の後期大型前方後円墳
2. 後期の大型前方後円墳造営にみられる地域差
3. 関東の後期大型前方後円墳の被葬者像
4. 後期大型前方後円墳からみた畿内と東国
むすび

論文要旨

古墳時代後期の6世紀に日本列島の各地で造営された墳丘長60メートル以上の大型前方後円墳の数を比較すると，他の諸地域に比べ関東地方にきわめて多いことが知られる。律令体制下の国を単位にみてみると，関東では上野97，下野16，常陸38，下総11，上総28，安房0，武蔵26，相模0で，合わせて216基となる。うちに大王墓をも含む畿内地方でも大和20，河内12，和泉0，摂津2，山城5の計39基にすぎず，さらに吉備地方では，備前2，備中1，備後1，美作0の計4基にすぎない。また東海地方の尾張では12，美濃では7基を数えるが，尾張に多いのは継体大王の擁立にこの地の勢力が重要な役割をはたしたという特別の政治的理由によるものと思われ，東日本の中でも関東地方だけが後期前方後円墳の造営において特殊な地域であったことは明らかである。

一般に前方後円墳は，畿内勢力を中心に構成されていた政治連合に加わった各地の首長たちが，この連合における身分秩序にしたがって営んだものと考えられているが，6世紀の関東地方では前方後円墳の造営に際してそれ以外の地域とは明らかに異なる基準が適用されたことになる。また小地域における大型前方後円墳の密集度からも，その被葬者は単なる領域的支配者としての地域首長であるばかりでなく，畿内王権がこの地方に数多く置いた子代・名代などの部や舎人などの地方管掌者としての性格をも併せもつものであったと考えざるをえない。関東地方に他の地域と異なる基準に基づいて数多くの大型前方後円墳が営まれた理由は，この地域が畿内政権をささえる経済的・軍事的基盤としてきわめて重要な地域であったこと，さらに畿内諸勢力の連合体としての畿内政権を構成する諸豪族がそれぞれにこの地域の在地勢力と結びついて支配の拠点をえようとした結果と考えられ，まさに畿内政権の構造的特質によるものと思われるのである。

はじめに

大阪平野にみられる大仙陵古墳（現仁徳天皇陵，墳丘長486メートル）や誉田御廟山古墳（現応神天皇陵，同420メートル）の存在が物語るように，古墳時代中期の5世紀にピークを迎えた大型前方後円墳の造営は，後期[1]の6世紀になると急速に下降線をたどり，その規模，数ともに減少するといわれる。確かに畿内地方（近畿中央部）などでは，中期には18基を数えた墳丘長が200メートルをこえる超大型前方後円墳が，大王墓と推定される奈良県橿原市見瀬丸山古墳（墳丘長318メートル），大阪府松原市河内大塚古墳[2]（同335メートル）の2基，さらに中期から後期の過渡期に位置づけられる大阪府藤井寺市の岡ミサンザイ古墳（現仲哀天皇陵，同238メートル）を含めてもわずか3基しか見られなくなる。また墳丘長100メートル以上の前方後円墳の数も，中期の30基に対して半数以下の14基に減少する。こうした傾向は中期に岡山市造山古墳（墳丘長360メートル）のような巨大な古墳が営まれた吉備地方などについても同様で，少なくとも西日本各地に共通した現象と理解して大きな誤りはなかろう。

しかしこの常識的理解は，東日本の少なくとも関東地方については必ずしも当てはまらないようである。かつて指摘したように[3]，例えば北関東の上野（群馬県）地方をみると，後期の墳丘長100メートル以上の前方後円墳は16基を数え，さらに墳丘長60メートル以上になると実に97基を数える。同時期の大和でも，100メートル以上の前方後円墳が10基，60メートル以上が20基を数えるにすぎないことと比較すると，その数の多さに驚かされるのである。このことは畿内以西の地域の墳丘長100メートル以上の後期前方後円墳が，福岡県八女市岩戸山古墳（墳丘長140メートル），同善蔵塚古墳（同約100メートル），岡山県総社市こうもり塚古墳（同約100メート）ルのわずか3基にすぎないことを考慮するとさらに明瞭となる。他の多くの地域で大規模な前方後円墳の造営が急速に衰退するなかで，上野地方の後期大型前方後円墳の造営数は異常ともとらえられるのである。確かに中期にみられた群馬県太田市太田天神山古墳（墳丘長210メートル）のような巨大な前方後円墳はみられなくなるが，墳丘長60～100メートル前後の前方後円墳は，前期・中期にくらべ明らかに増加するのである。こうした現象は，上野ほど顕著ではないにしても，南関東をも含めて他の関東各地にも共通してみられるところであり，こうした後期における大型前方後円墳造営の盛行は，関東地方のみにみられるきわめて特異な現象と認められるのである。

岩崎卓也が指摘するように[4]，関東地方における後期前方後円墳の盛行は，なにも大型のものにかぎらず，中型や小型の前方後円墳についても指摘できる現象である。ただ，いわゆる帆立貝式古墳をも含めた中・小型の前方後円墳は，発掘をともなう調査によってはじめてその実態が知られるものが多く，今すぐ全国的なレベルでの比較や評価は困難というほかない。また小型前方後円墳と比較的大規模な円墳や方墳との違いの意味するところを明確にすることもなかなかむつかしい。小規模な前方後円墳の研究の重要性を痛感しながらも，ここでは現状でもある程度検討の

可能な，墳丘長60メートル以上の大型前方後円墳[5]に焦点をしぼって検討したい。特にそれを畿内など西日本各地のあり方と比較することによって，6世紀における東国豪族層の存在形態の特異性を明確にし，畿内王権と東国との政治的関係についても考察を加えてみることにしたい。それは古代国家形成前夜の畿内と東国の関係を考古学的方法によって探るうえに有効な課題と考えられるのである。

註

（1） ここでは，前方後円墳が造営されている時代を前期・中期・後期の三時期に区分し，さらに前方後円墳の造営が停止されて以降なお古墳の造営がつづく時代を終末期とする，古墳時代四時期区分法をとる。前期，中期は従来の三時期区分法のそれにかわらず，後期をさらに二期に区分したことになる。後期の暦年代については，ほぼ5世紀末葉から6世紀末ないし7世紀初頭までと考えている。

（2） 墳丘には本来埴輪をともなっていなかった可能性が大きく，また大阪府高槻市今城塚古墳などと同じように前方部の前面が直線をなさず，その中央がわずかに突出する平面企画上の特長などからも後期古墳と考えられる。

（3） 白石太一郎「後期古墳の成立と展開」（岸　俊男編『王権をめぐる戦い』古代の日本6，中央公論社，1986年）240～247頁。

（4） 岩崎卓也「総論」（『古墳時代の研究』11　地域の古墳Ⅱ　東日本，雄山閣，1990年）12～14頁。

（5） 前方後円墳の規模は，時期により大きく異なるので一概に大型・小型，大規模・小規模といってもあまり意味がない。後期古墳を対象とする本稿では，一応墳丘長60メートル以上の前方後円墳を大型前方後円墳ととらえ検討の対象とするが，60メートルで線を引くことに特に積極的意味はない。ただ①それ以下の規模の古墳に比較して把握されやすく，資料としての捕捉率が高いと思われること，②一応このクラス程度以上の前方後円墳はあきらかに在地有力首長層の古墳と判断でき，その動向をさぐるうえに有効と思われることによる。

1.　関東地方の後期大型前方後円墳

まず，関東地方各地の古墳時代後期の，墳丘長60メートル以上の前方後円墳の分布状況を，ほぼ律令制の国を単位に北方から時計回りの順にみていくことにしよう。なお，律令制の国を単位にするのは，あくまでも便宜的なものにすぎず，そうした政治的地域区分の存在を前提に検討するわけではない。旧郡単位に古墳の分布を検討する場合も同様である。

（1）　上野地方

群馬県では，昭和10年（1935）に全県的な古墳の現状調査が行われ，その結果が『上毛古墳綜覧』[1]にまとめられている。この貴重な調査の記録によって，他の地域では不明なところの少なくない第二次世界大戦以前の古墳分布の状況をほぼ知ることができる。上野地方（群馬県）の後期の大型前方後円墳の分布は，山間部を除くほぼ全域に及んでいる。上野国では和銅4年（711）に多胡郡が設置される以前の郡の数は13であるが，旧郡単位では，山間部の吾妻，利根両郡を除く11郡のすべてにその分布が認められる[2]。

まず碓氷川流域の碓氷郡域には，関東地方で最も古い時期の横穴式石室をもつ安中市梁瀬二子

塚古墳（墳丘長78メートル）がある。この石室からは粗製の石製模造品とともに畿内のＴＫ47型式に並行すると思われる在地産の須恵器が出土しており，５世紀末葉にさかのぼることは確実であろう。ただ同郡内にはこれに続く時期の大型前方後円墳は今のところ知られていない。

赤城南麓の勢多郡には，前橋市大室古墳群に前二子古墳（墳丘長92メートル），中二子古墳（同72メートル），後二子古墳（同76メートル），伊勢山古墳（同67メートル），旧荒砥村120号墳（同60メートル）などの大型前方後円墳がみられる。三二子古墳のうち前二子古墳は梁瀬二子塚古墳につぐ古式の横穴式石室をもち，ＭＴ15型式並行の須恵器が出土しており，６世紀前半のものであることが知られ，後二子は横穴式石室の型式から６世紀後半と判断され，中二子はおそらくその間に入るものであろう。またその西方荒砥川の中流域には，荒砥大塚古墳(墳丘長80メートル)，旧荒砥村338号墳（同70メートル），旧荒砥村286号古墳（同60メートル），権現山古墳（同70メートル）などの存在が知られており，いずれも後期のものと想定される。またその西方前橋市堀之下町には，梁瀬二子塚古墳例に近い形式の古式横穴式石室をもつ正円寺古墳（同70メートル）が，同東片貝町には桂萱大塚古墳(同約60メートル)，同笂井町木瀬１号墳（同61メートル）があり，またその北方の勢多郡富士見村にも横穴式石室をもつ前方後円墳の九十九山古墳（同60メートル）がある。

旧群馬郡域では，群馬郡群馬町の保渡田古墳群，前橋市北部の総社古墳群，高崎市の綿貫古墳群，同佐野古墳群の四地区を中心に後期の大型前方後円墳が分布している。まず三ツ寺Ｉ遺跡の豪族居館との関連性が注目されている保渡田古墳群には，二子山古墳（墳丘長111メートル），八幡塚古墳（同102メートル），薬師塚古墳（同約100メートル）がある。このうち最もさかのぼる二子山古墳には二次調整のＢ種ヨコハケの円筒埴輪が小量みられるものの，多くは二次調整のみられない段階のものであり，５世紀後半にさかのぼる可能性が大きいが，ここでは後期古墳としてとらえておきたい。これに続く八幡塚古墳は，出土した馬具や埴輪，土器などから５世紀末葉のものと想定され，さらに最も新しい薬師塚古墳も周溝内に榛名二ツ岳のＦＡ火山灰の堆積がみられるところから６世紀初頭頃の構築にかかるものと思われる。三古墳ともきわめて接近した時期に造営されたものであることが注目される。

総社古墳群の後期の前方後円墳としては，総社二子山古墳（墳丘長90メートル），遠見山古墳（同67メートル），王河原山古墳（同61メートル），王山古墳（同76メートル）がある。このうち王山古墳は，梁瀬二子塚古墳例と共通する特徴をもつ古式の横穴式石室をもつが，墳丘が榛名二ツ岳のＦＡ火山灰層の直上に構築されているところから６世紀の第１四半期のものであろう。二子山古墳は後円部と前方部の横穴式石室の型式から６世紀後半から末葉のものと考えられる。王河原山古墳と遠見塚古墳は両古墳の間におさまるものであろう。なおこの総社古墳群は７世紀に入ってもなお愛宕山古墳（一辺60メートル），宝塔山古墳（同60メートル），蛇穴山古墳（同約40メートル）の三基の大型方墳が相次いで構築されることで知られている。

綿貫古墳群は井野川左岸に位置する前期の前方後方墳元島名将軍塚古墳（墳丘長91メートル）

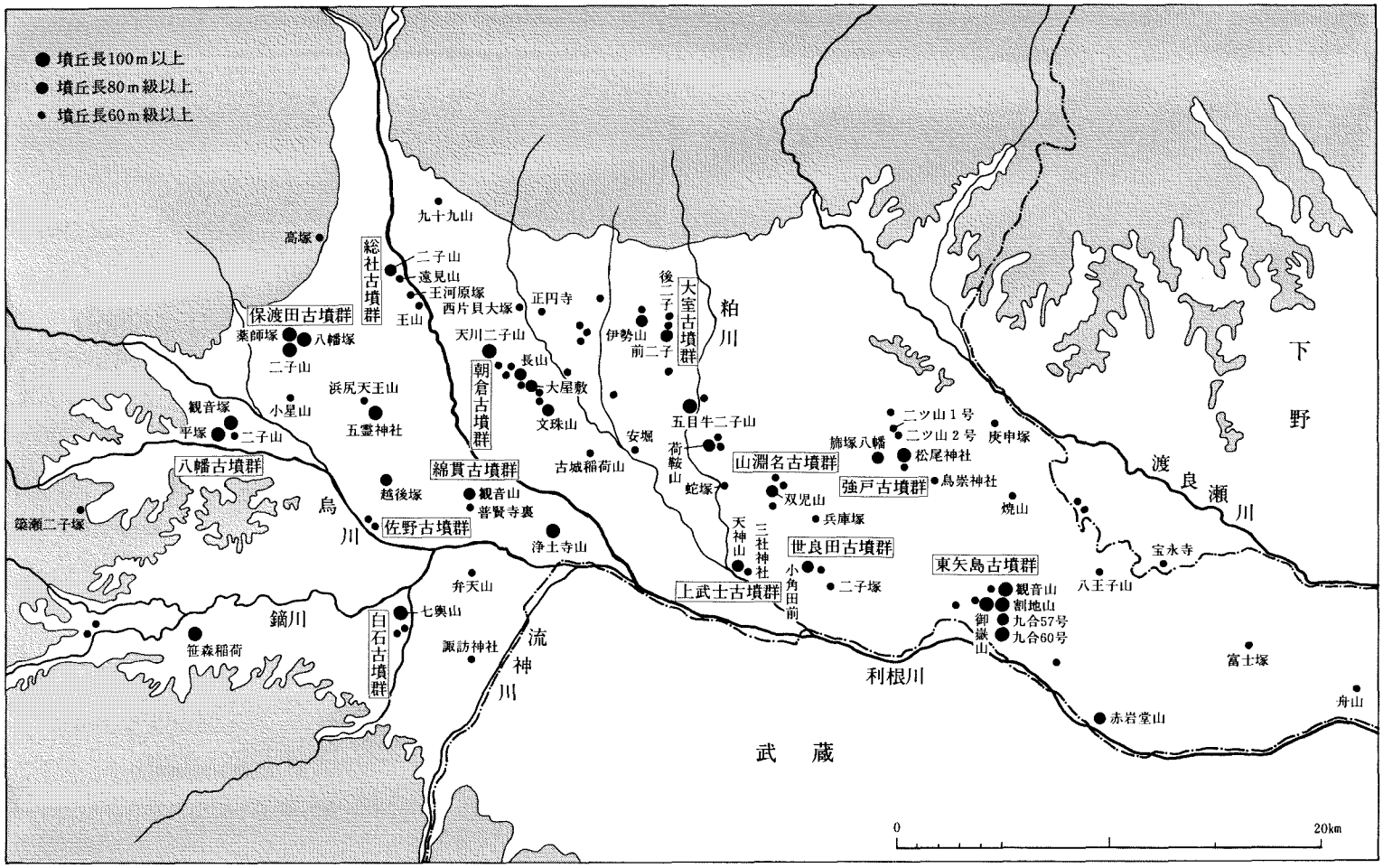

図1　上野地域における後期大型前方後円墳の分布

や，中期の綿貫二子山古墳，不動山古墳（同94メートル）などから首長墓の系譜がたどれる古墳群で，後期のものとしては武寧王陵と同型の獣帯鏡や響銅の水瓶などの豪華な副葬品の出土した綿貫観音山古墳（同97メートル）と普賢寺裏古墳（同70メートル）がある。綿貫観音山古墳の須恵器はＴＫ43型式並行のもので６世紀後半の古墳である。佐野古墳群も前期の大前方後円墳である浅間山古墳（同171メートル）などから続く古墳群であり，後期のものとしては御堂塚古墳（同60メートル）と新しい横穴式石室をもつ漆山古墳（同62メートル）がある。さらにその北方，高崎市上中居町には後期の大型前方後円墳と考えられる越後塚古墳があった。このほか，綿貫古墳群や保渡田古墳群と同様井野川流域で両者の中間にあたる高崎市北部には銅椀の出土が伝えられる貝沢五霊神社古墳（墳丘長109メートル），浜尻天王山古墳（同約60メートル）があり，その西方の上並榎古墳群には前方後円墳の小星山古墳や大型円墳の上小塙稲荷塚古墳などがある。さらに北群馬郡榛東村には比較的古い型式の横穴式石室をもつ高塚古墳（同60メートル）がある。

群馬郡の西に位置する片岡郡域には高崎市八幡古墳群があり，八幡観音塚古墳（墳丘長約100メートル），平塚古墳（同105メートル），八幡二子山古墳（同約60メートル）などの後期の前方後円墳がある。このうち平塚古墳からは２基の舟形石棺が発見されており後期初頭のものと想定され，また観音塚古墳からは銅椀類など多量の副葬品が出土しており，須恵器がＴＫ209型式並行であるところから，７世紀初頭に下る最終末段階の前方後円墳であることが知られる。

緑野郡域では，白石稲荷山古墳（墳丘長約150メートル）など中期の大型前方後円墳を含む白石古墳群に後期の大型前方後円墳がみられる。七輿山古墳（同145メートル），旧美土里村16号古墳（同62メートル），白石二子山古墳（約60メートル）などである。このうち七輿山古墳は，大規模な二重の周溝をもつ大古墳で，円筒埴輪の中に一部であるが二次調整のヨコハケをもつものがみられるところなどから後期初頭の５世紀末葉にさかのぼるものと想定される。白石二子山古墳は馬具や飾大刀の出土から後期後半のものであることが知られる。さらに白石古墳群の東方，藤岡市内には諏訪神社古墳（墳丘長約60メートル）が，その北方の同市森地区には弁天山古墳（同約60メートル）がある。

緑野郡の西方，鏑川流域の甘楽郡域に入ると，甘楽郡甘楽町に長大な横穴式石室をもつ６世紀後半の笹森稲荷古墳（墳丘長100メートル）があり，さらに上流の富岡市域には粘土山古墳（同62メートル），太子堂古墳（同60メートル）などがある。

那波郡域では，前橋市朝倉古墳群と佐波郡玉村町の玉村古墳群の二カ所を中心に後期の大型前方後円墳が分布する。朝倉古墳群は前方後円墳の後閑天神山古墳（墳丘長130メートル），前方後方墳の八幡山古墳（同130メートル）など前期の大型古墳からはじまる上野でも屈指の大古墳群であるが，後期の前方後円墳も天川二子塚古墳（同104メートル）を筆頭に大屋敷古墳（同82メートル），上両家二子山古墳（同80メートル），文珠山古墳（同80メートル），長山古墳（同78メートル），旧上川淵村68号墳（同78メートル），旧上陽村17号墳（同78メートル），旧上川淵村26号墳（同71メートル），旧上陽村12号古墳（同67メートル），同13号墳（同61メートル）などがあ

り，さらに新羅様式の冠の出土で有名な山王二子山古墳（金冠塚古墳，同52メートル）など墳丘長が60メートル未満50メートル以上の前方後円墳だけでも7基も数えることができる。一方玉村古墳群には，浄土寺山古墳（同110メートル），オトカ塚古墳（同90メートル），八王子塚古墳（同80メートル）などの大規模な前方後円墳があったことが知られている。

佐位郡域では，粕川流域に三群，その東方の早川流域に一群，後期の大型前方後円墳からなる古墳群がみられる。まず粕川流域の佐波郡赤堀村西南部の五目牛を中心とする五目牛古墳群に，赤堀村五目牛二子山古墳(墳丘長約110メートル)，同下触二子山古墳（同60メートル），伊勢崎市の旧三郷村67号墳（同76メートル）などがある。またそのやや下流の伊勢崎市東方から東村にかけての殖蓮古墳群には荷鞍山古墳（同80メートル），八寸雷電山古墳（同65メートル），旧殖蓮村222号墳（同64メートル），蛇塚古墳（同60メートル）などが，さらに下流の広瀬川との合流点付近の境町の武士古墳群には，上武士天神山古墳（同80メートル），下武士三社神社古墳（同約60メートル）がある。また早川右岸の佐波郡東村の上淵名古墳群には，上淵名双子山古墳（同90メートル），下谷A号墳（同70メートル），旧采女村30号墳（同63メートル），下谷雷電山古墳（同61メートル）などがある。このほか伊勢崎市安堀町の中期の前方後円墳お富士山古墳（同125メートル）を中心とする安堀古墳群にも後期の三郷村91号墳（同74メートル）が，その西方同市稲荷町にも古城稲荷山古墳（同60メートル）がみられる。

佐位郡の東方の新田郡域でも後期の大型前方後円墳は三群ほどに分かれて分布する。最大の古墳群は太田市南部の東矢島古墳群（道風山古墳群）である。(3) 旧九合村60号墳（墳丘長約120メートル）を筆頭に，割地山古墳（旧九合村51号墳，同約110メートル），御嶽山古墳（旧沢野103号墳，同約110メートル），観音山古墳（同約100メートル），旧九合村57号墳（同95メートル），旧沢野村104号墳（同73メートル），同105号墳（同62メートル）などがある。なお，この東矢島古墳群のすぐ西方の高林古墳群には，後期の帆立貝式前方後円墳である旧沢野村47号墳（同約60メートル）をはじめ中期末から後期にかけての墳丘長50メートル前後の帆立貝式古墳が4基も存在することが注意される。

一方，太田市西北部の寺井付近には，中期の大前方後円墳である鶴山古墳（墳丘長102メートル）があるが，その周辺には，松尾神社古墳（同108メートル），旄塚八幡山古墳（同90メートル），二ツ山1号墳(同76メートル)，二ツ山2号墳（同67メートル），西長岡長塚古墳（旧強戸村33号墳，同70メートル），横塚古墳（同70メートル），鳥崇神社古墳（同68メートル）などの後期の前方後円墳が散在する。さらに太田市の西方新田郡尾島町世良田付近には，小角田前古墳（旧世良田村37号墳，墳丘長90メートル），旧世良田村36号墳（同72メートル），二子塚古墳（同60メートル）のほか文珠山古墳，兵庫塚古墳など50メートル級の後期前方後円墳が4基もみられる。

山田郡域に入ると，現在群馬，栃木両県の県境となっている矢場川右岸の矢場川古墳群やその左岸に展開する小曽根古墳群に後期の前方後円墳がみられる。矢場川古墳群は前期の前方後方墳藤本観音山古墳（墳丘長126メートル）にはじまる古墳群であるが，その西北方に旧矢場川村39

号墳（同70メートル），横穴式石室をもつ同41号墳（同61メートル）があり，小曽根古墳群には横穴式石室をもつ永宝寺古墳（同60メートル）がある。また矢場川古墳群の西北方，金山山塊東方の山丘上には焼山山頂古墳（同約60メートル）が，さらに金山山塊の東北麓の毛里田古墳群には家形石棺をもつ庚申塚古墳（同約60メートル）が存在する。なお，この毛里田古墳群では，7世紀に入ると一辺30メートルの方墳巌穴山古墳が営まれる。

邑楽郡では，邑楽郡邑楽町に石打八王子山古墳（墳丘長75メートル），同郡千代田村に横穴式石室をもつ赤岩堂山古墳（同80メートル），旧永楽村6号墳（同61メートル），館林市域には富士塚古墳（同66メートル），さらに邑楽郡板倉町には舟山古墳（同62メートル），筑波山古墳（同55メートル）などの後期の大型前方後円墳が知られている。

以上，上野地域の墳丘長60メートル以上の後期前方後円墳の分布状況を概観した。いまその概数を旧郡単位に整理してみると，碓氷1，勢多13，群馬16，片岡3，緑野5，甘楽3，那波13，佐位15，新田18，山田5，邑楽5の合計97基となり，山間部の吾妻，利根を除くすべての郡に濃密に分布していることが知られる。また規模別でみると墳丘長120メートル以上が1基，100メートル以上120メートル未満が15基，80メートル以上100メートル未満が17基，60メートル以上80メートル未満が64基ということになる。また，例えば群馬郡域では保渡田古墳群，総社古墳群，綿貫古墳群，佐野古墳群などというように，多くの郡内では複数の古墳群に分かれて大型前方後円墳が営まれており，そうした大型の前方後円墳を営んだ勢力が，律令制の郡の範囲よりもはるかに小さな地域を基盤とするものであったことが知られるのである。

（2）下野地方

上野地方における後期の大型前方後円墳の分布が，ほぼその全域にわたって万遍なくみられたのに対し，下野地方の場合には極端な偏りがみられる。後期の有力な政治勢力の存在を示す大型前方後円墳の多くは，思川流域の旧都賀郡域に集中するのである。(4)

まず，後期初頭，小山市北部の思川と姿川の合流点付近に摩利支天塚古墳（墳丘長117メートル），琵琶塚古墳（同123メートル）の二大前方後円墳が営まれる。ともに二次調整を略した円筒埴輪をもつが，その技法などから摩利支天塚古墳の方が琵琶塚古墳より古く，前者が5世紀末葉，後者が6世紀初めのものと想定されている。この小山市北部から北の国分寺町，壬生町南部にかけては後期から終末期にかけての大型古墳のとくに多いところで，壬生町藤井には前方部に切石造りの横穴式石室が存在したことの知られる吾妻岩屋古墳（墳丘長115メートル）(5)が，国分寺町には国分寺愛宕塚古墳（同80メートル），山王塚古墳（同82メートル），帆立貝式の前方後円墳である甲塚古墳（同約80メートル）などが存在する。

この国分寺古墳群ともいうべき後期から終末期に中心のある大古墳群の北方，壬生町壬生には壬生古墳群がある。群の中心は終末期の円墳としては日本列島で最大の規模をもつ壬生車塚古墳（墳丘直径82メートル）があり，その南には後期の前方後円墳の壬生愛宕塚古墳（墳丘長65メー

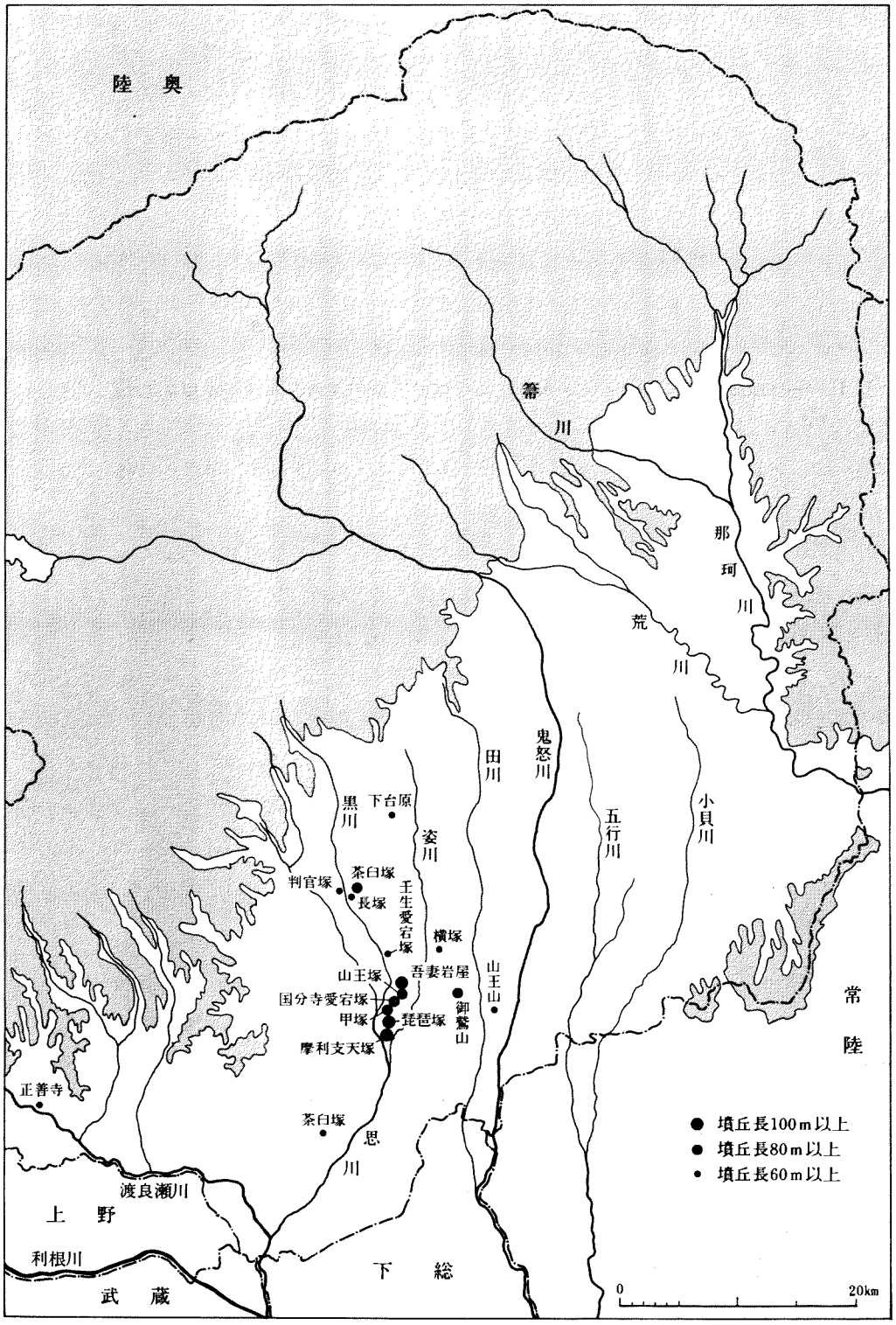

図2　下野地域における後期大型前方後円墳の分布

トル）がある。

またさらにその北方，壬生町羽生田の羽生田古墳群には茶臼山古墳（同86メートル），長塚古墳（同75メートル）などの後期前方後円墳があり，さらに終末期には円墳桃花原古墳（墳丘直径63メートル）が営まれる。また姿川をはさんでその対岸の鹿沼市北赤塚にも判官塚古墳（墳丘長61メートル）がある。さらに鹿沼市深津には下台原古墳（同73メートル）がある。一方，壬生古墳群の西方，姿川の西岸の下都賀郡石橋町の石橋には短い突出部をもつ帆立貝式の円墳の下石橋愛宕塚古墳（墳丘径82メートル）と前方後円墳の横塚古墳（墳丘長70メートル）が存在した。

以上はすべて旧都賀郡域に含まれるものであるが，それ以外の各郡の後期大型前方後円墳として知られるものはきわめて少ない。まず都賀郡の東側の旧河内郡域では，その南部の河内郡南河内町寺山に，前方部に切石造りの横穴式石室をもつ御鷲山古墳（墳丘長約80メートル程度か）が，同町三王山に三王山古墳（墳丘長72メートル）が知られる。しかしその北部には，宇都宮市北山古墳群に宮下古墳（同43メートル），権現山古墳（同40メートル）などがあるがいずれも墳丘長が50メートル未満である。

河内郡の東の芳賀郡では，芳賀郡二宮町の上大曽1号墳（墳丘長約40メートル），真岡市中村大塚古墳，芳賀郡益子町天王塚古墳，宇都宮市の鬼怒川左岸の竹下浅間山古墳（同53メートル）などがあるが，いずれも墳丘長が60メートルに達しない。

一方，下野南部の寒川郡域と想定される小山市の思川底地には鼉竜鏡などが出土した茶臼塚古墳（墳丘長77メートル）があり，円筒埴輪の型式などから後期初頭の5世紀末頃の古墳と考えられている。また寒川郡の西方の足利郡域には，足利市正善寺古墳（同約70メートル）がある。

下野北部の旧那須郡域にも，那須郡馬頭町の川崎古墳（墳丘長約50メートル），同郡小川町の梅曽大塚古墳（同約50メートル），同町首長原古墳（同約40メートル），同郡湯津上村二ツ室塚古墳（同47メートル），同村下侍塚1号古墳（同約40メートル）など少なくない後期の前方後円墳があるが，いずれもその墳丘長は60メートル未満である。

このように，下野地方の後期大型古墳群はその分布状況に大きな偏りがみられ，墳丘長60メートル以上のものを旧郡単位に数えると，都賀12，河内2，寒川1，足利1の計16基となり，そのほとんどが後に下野国府がおかれる都賀郡に集中する。規模別では120メートル以上が1基，120メートル未満で100メートル以上が2基，100メートル未満で80メートル以上が5基，80メートル未満で60メートル以上が8基となり，100メートル以上の3基はすべて都賀郡域にみられる。また，現在のところ都賀，河内，寒川，足利以外の安蘇，梁田，芳賀，塩谷，那須の各旧郡には墳丘長60メートル以上の後期前方後円墳は見いだせない。ただ河内郡の北部や，芳賀，那須などの諸郡では墳丘長40～50メートル級の中型の後期前方後円墳が少なからず見出せることは注意しておくべきであろう。

(3) 常陸地方

常陸地方における後期の大型前方後円墳や終末期の大型古墳の分布状況についてはすでに別稿でくわしく検討したことがあるので[6]，ここでは簡単に各旧郡単位のあり方をまとめておく。

常陸の場合も下野ほどではないが，後期の大型前方後円墳の分布に大きな偏りがみられ，その約半数が旧茨城郡の，それも霞ケ浦（西浦）の北部の沿岸に集中する。もっとも集中度が高いのは高浜入の北岸で，新治郡玉里村を中心に大井戸古墳（墳丘長約100メートル），権現山古墳（同95メートル），舟塚古墳（同88メートル），滝台古墳（同84メートル），山田峰古墳（同84メートル），桃山古墳（同74メートル），閑居台古墳（同74メートル），愛宕塚古墳（同66メートル）が展開し，東茨城郡小川町の下馬場にも地蔵塚古墳（同65メートル）がある。さらに高浜入の南を画する出島半島の現新治郡出島村にも，富士見塚古墳（同92メートル），風返稲荷山古墳（同70メートル），赤塚天神山古墳（同69メートル），折越十日塚古墳（同68メートル），坂稲荷山古墳（同65メートル），牛渡銚子塚古墳（同65メートル），大師唐櫃古墳などがあり，また土浦入の奥にあたる土浦市域の常名天神塚古墳（同78メートル），瓢単塚古墳（同74メートル）も後期の前方後円墳と考えられている。

霞ケ浦（西浦）東岸の行方郡では，その北部の行方郡玉造町に三昧塚古墳(墳丘長85メートル)があり，その南部の行方郡潮来町大生西古墳群には孫舞塚古墳（大生西1号墳，墳丘長72メートル），天神塚古墳（大生西4号墳，同63メートル），鹿見塚古墳（大生西2号墳，同58メートル），大生西5号墳（同60メートル）がある。

北浦と鹿島灘にはさまれた鹿島郡域では，その南部の鹿島郡鹿島町宮中野古墳群に，夫婦塚古墳（宮中野7号墳，墳丘長108メートル）のほか宮中野72号墳，同52号墳，同88号墳など墳丘長40～50級の前方後円墳が3基ほどみとめられ，さらに終末期には造出し付きの大円墳である宮中野大塚古墳（円丘径80メートル）がある。

霞ケ浦（西浦）西南岸の信太郡域には，稲敷郡美浦村の木原台4号墳（墳丘長約60メートル）があり，筑波山南麓の旧筑波郡域には，つくば市八幡塚古墳（同95メートル），甲山古墳（後円部径30メートル）が，その南の河内郡域にはつくば市の横町古墳(同75メートル)，古塚古墳，松塚1号墳（同69メートル）などがある。さらに筑波郡の北の白壁郡には現在のところ後期の大型前方後円墳は知られていないが，真壁郡明野町には宮山観音古墳（墳丘長92メートル），灯火山古墳（同70メートル），台畑古墳（同72メートル）など比較的大規模な中期の前方後円墳があり，付近には墳形は不明であるが後期の人物埴輪をともなった鷺島古墳などが存在したことなどから，後期の前方後円墳が存在した可能性は大きいと思われる。その北部にひろがる新治郡域には真壁郡関城町茶焙山古墳（同約70メートル程度か）がある。

那珂川流域の那珂郡域では，東茨城郡の内原町に舟塚古墳（墳丘長約80メートル），二所神社古墳（同約80メートル）が，那珂湊市には川子塚古墳（同約90メートル）が後期ないし終末期の

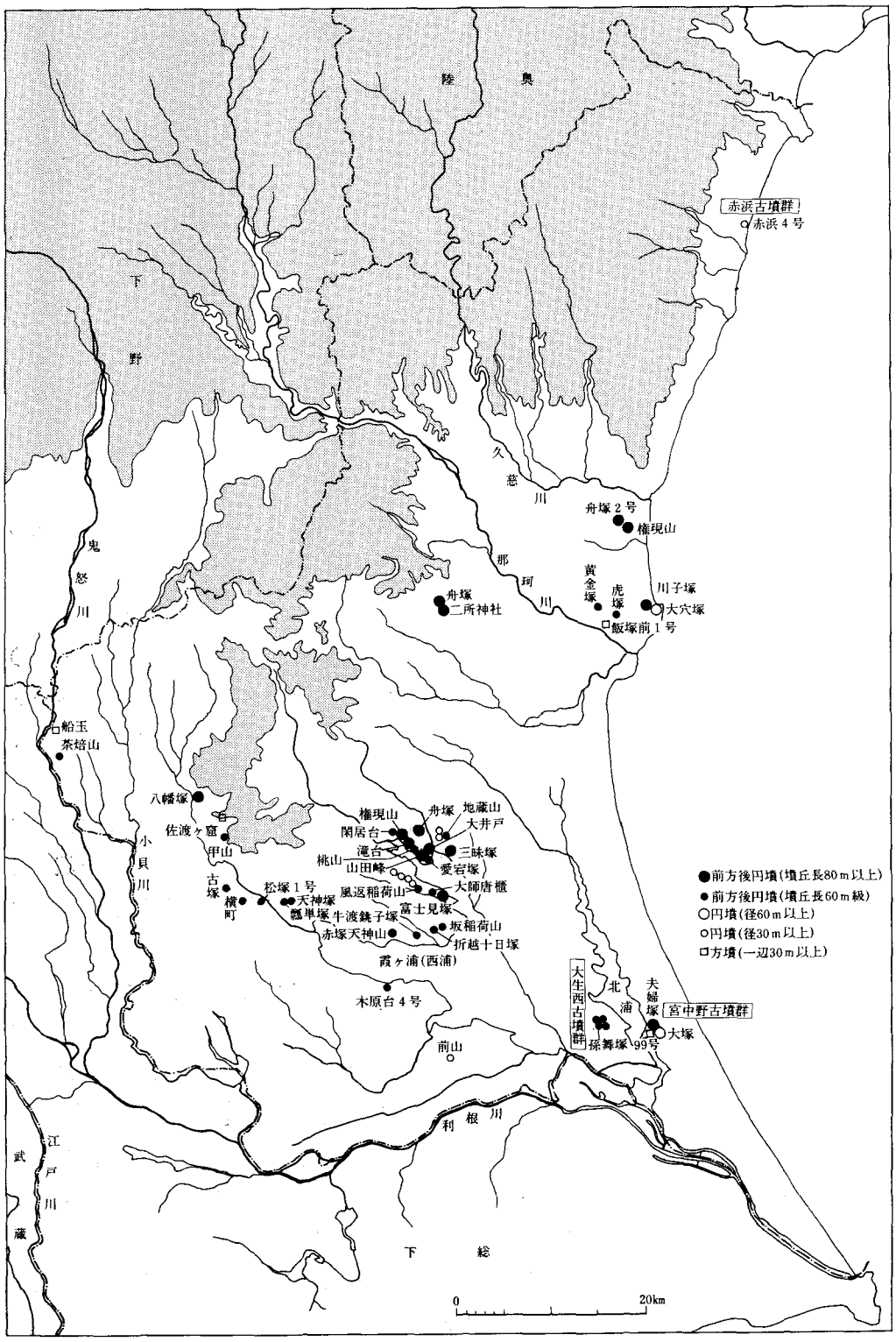

図3　常陸地域における後期大型前方後円墳の分布

大円墳である大穴塚古墳（径60メートル）などとともにみられる。さらに勝田市には黄金塚古墳（同約60メートル）や壁画古墳として有名な虎塚古墳（同57メートル）がある。

さらに北方の久慈郡域には，現那珂郡東海村の権現山古墳（墳丘長約90メートル）や舟塚２号墳（同約80メートル）がみられ，多珂郡域には，墳丘長50メートルの前方後円墳が赤浜古墳群のなかに見いだせる。

以上を整理すると，旧郡単位にみた後期の墳丘長60メートル級以上の前方後円墳は，茨城18，行方５，鹿島１，信太１，筑波２，河内３，新治１，那珂５，久慈２の計38基となる。規模別では120メートル未満100以上が２基，100メートル未満80メートル以上が12，80メートル未満60メートル以上が24基である。茨城郡への集中度は著しいが，ただ下野の場合と異なり，他のほとんどの郡にも少数ながら後期大型前方後円墳の分布がみられる。残りの２郡のうち白壁郡にも存在した可能性は大きく，多珂郡にも50メートル級の前方後円墳は存在するのである。また常陸の場合，時期の限定が困難ではあるが，後期のものである可能性の大きい大型円墳や帆立貝式古墳も少なからずみられるようであり，それらの追求が今後の大きな課題であろう。

（４） 下総地方

下総地域で後期の大型前方後円墳が営まれた地域は，利根川右岸の香取郡小見川町周辺と佐原市周辺，九十九里浜に注ぐ栗山川上流，印旛沼東北方の竜角寺古墳群や公津原古墳群，江戸川左岸の国府台古墳群などにかぎられる。(7)

まず小見川町小見川の台地上には三角縁神獣鏡を出した後期古墳として知られる城山１号墳（墳丘長68メートル）がある。付近には下総最大の前方後円墳で中期前半にさかのぼる三之分目大塚山古墳（同120メートル）がある。また佐原市域では，小野川下流域に浅間神社古墳（同70メートル）が，佐原市の西で利根川に注ぐ大須賀川の下流域にはいずれも後期前半と考えられる森戸大法寺山古墳（同約60メートル），権現山古墳（同約60メートル），禅昌寺山古墳（同約60メートル）がある。一方，栗山川上流の香取郡干潟町鏑木には下総最大の後期古墳である御前鬼塚古墳（同105メートル）があり，同じく香取郡多胡町東松崎には北条塚古墳（同70メートル）がみられる。これらの古墳はいずれも現在の行政区画では香取郡域に含まれているが，このうち小見川町は海上郡に，干潟町や多古町が匝瑳郡に属していたことはあきらかである。(8) したがって城山１号墳が旧海上郡に，御前鬼塚古墳や北条塚古墳が旧匝瑳郡に，浅間神社古墳や森戸大法寺古墳，禅昌寺山古墳など佐原市域の古墳が旧香取郡に含まれていたことになろう。

つぎに印旛沼周辺では，終末期の方墳としては日本列島最大の規模をもつ竜角寺岩屋古墳のある印旛郡栄町の竜角寺古墳群に浅間山古墳（墳丘長72メートル）がある。この竜角寺古墳群にはほかにも多くの後期の前方後円墳が存在するがいずれも墳丘長が40メートル未満のものである。この竜角寺古墳群の南の成田市公津原古墳群には，特異な前方後方形の墳丘をもつ船塚古墳（墳丘長85メートル）があり，円筒埴輪などから６世紀後半の古墳と考えられている。また群中には

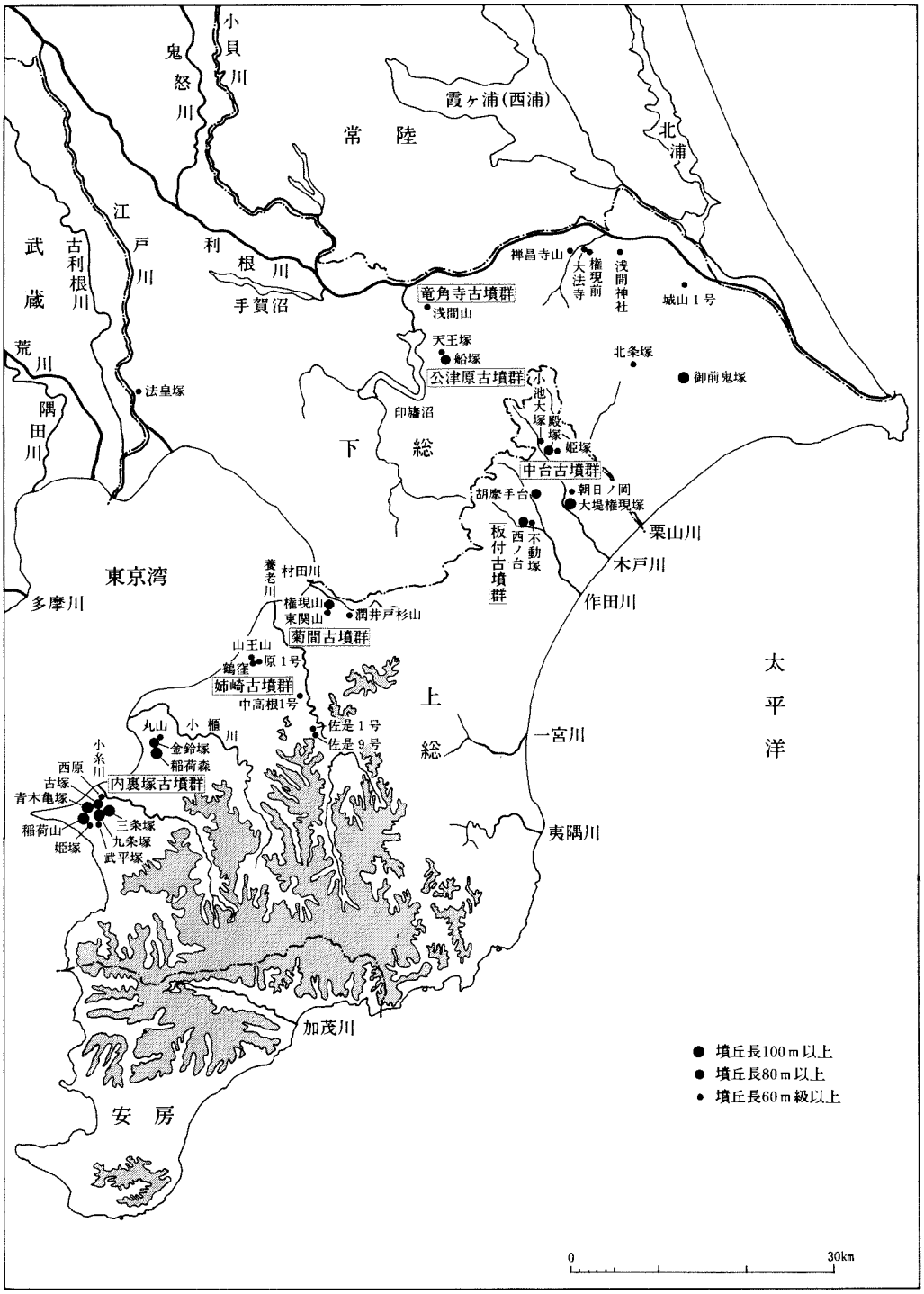

図4　上総・下総地域における後期大型前方後円墳の分布

天王塚古墳（同約65メートル），石塚古墳（同40メートル）などの後期前方後円墳や終末期の方墳である手黒麻賀多神社古墳（伝伊都許利命墓，一辺35メートル）もある。このうち竜角寺古墳群は律令制下の埴生郡に含まれていたことはほぼ確実であり，公津原古墳群が旧印旛郡に含まれるのであろう。

旧葛飾郡域に含まれる市川市の国府台古墳群には，古式の横穴式石室をもつ前方後円墳の法皇塚古墳（墳丘長58メートル）がある。このほか旧相馬郡域にあたる我孫子市の我孫子古墳群などでも後期の前方後円墳は知られているがいずれも小規模なものであり，現在のところ現千葉県内の旧千葉・相馬の両郡や現茨城県内の旧猿島・結城・豊田の各郡域では，墳丘長60メートル級以上の後期の前方後円墳は知られていないようである。

このように下総地方では，後期の大型前方後円墳はその周辺地域にくらべると比較的少ない。墳丘長60メートル級以上のものは海上1，匝瑳2，香取4，印旛2，埴生1，葛飾1で計11基にすぎない。墳丘規模では，100メートル以上が1基，100メートル未満80メートル以上が1基，80メートル未満で60メートル級以上が9基となり，総数が少ないとはいえうちに墳丘長100メートル以上の前方後円墳を含むことが注目される。なお下総各地には，墳丘長50メートル未満の中小規模の前方後円墳や帆立貝式古墳は少なくなく，基準を下げれば後期の前方後円墳も決して少ないわけではない。

（5） 上総地方

上総は下総にくらべると後期の大型前方後円墳の数は多いが，その分布にはやはり大きな偏りがみられる。東京湾岸を北からみてゆくと，まず村田川の流域では，市原市菊間に後期初頭の権現山古墳（墳丘長90メートル）とそれにつづくと思われる東関山古墳（同約70メートル）が，同市潤井戸には杉山古墳（同約60メートル）があり，いずれも旧市原郡域に含まれる。ついで養老川の流域にはその下流左岸の市原市姉崎古墳群に原1号墳(同70メートル)，山王山古墳（同70メートル），鶴窪古墳（同約60メートル）が，中流左岸には中高根1号墳（同約60メートル），佐是1号墳（同約60メートル），同2号墳（同約60メートル）があり，旧海上郡域に含まれよう。

旧望陀郡域に含まれる小櫃川下流域では，中期に高柳銚子塚古墳（墳丘長120メートル）や祇園大塚山古墳（同約100メートル程度か）などの有力な古墳が営まれ，後期にも大型の前方後円墳が引き続き造営されたが，早くから破壊が進み実態があきらかでない。木更津市金鈴塚古墳（墳丘長95メートル），同稲荷森古墳[9]（同100メートル以上か），同丸山古墳[10]（同約70メートル）がかろうじて墳形と規模を知りえるが，ほかに6世紀後半から末葉のすぐれた遺物を出土している鶴巻塚古墳，松面古墳などは後期の大型前方後円墳ないし終末期の大型古墳であった可能性がきわめて大きい。なお，旧畔蒜郡に含まれる小櫃川中上流域には，前期には君津市岩出の飯籠塚古墳（墳丘長約100メートル），同市俵田白山神社古墳（同約100メートル）などの大規模な前方後円墳の造営が認められるが，後期の大型前方後円墳は今のところ知られていない。

つぎに旧周淮郡域に含まれる小糸川流域では，富津市内裏塚古墳群に多くの後期大型前方後円墳がみられる。この古墳群では中期中葉に総地域で最大の前方後円墳である内裏塚古墳（墳丘長約150メートル）が営まれるが，後期にも九条塚古墳（同105メートル），稲荷山古墳（同106メートル），三条塚古墳（同122メートル）の大前方後円墳が順次造営された。このほか青木亀塚古墳（墳丘長約100メートル），古塚古墳（同88メートル），西原古墳（同約70メートル），姫塚古墳（同約70メートル），武平塚古墳（同約70メートル）などもいずれも後期の前方後円墳である。さらにこの古墳群では終末期になっても割見塚古墳（墳丘一辺40メートル）などの大型方墳が続けて造営されていることが知られている。

一方太平洋側では，九十九里浜沿岸に注ぐ成東川，境川，木戸川の流域に多くの後期大型前方後円墳がみられる。まず成東川の流域では山武郡成東町の板附古墳群に西ノ台古墳（墳丘長約90メートル），不動塚古墳（同65メートル）があり，さらに終末期には大方墳の駄ノ塚古墳（一辺60メートル）が造営される。成東川の東を流れる境川の上流部には胡摩手台古墳（同約85メートル）があり，その下流には後期の比較的大規模な円墳である経僧塚古墳やカブト塚古墳がある。さらにその東を流れる木戸川流域では，下流の山武郡松尾町に大堤権現塚古墳（同117メートル），朝日ノ岡古墳（同76メートル）が，その上流の山武郡横芝町の中台古墳群には殿塚古墳（同88メートル），姫塚古墳（同58メートル）が，また付近には小池大塚古墳（同約70メートル）がある。さらに両古墳群の中間の松尾町の大塚古墳群には終末期のものと推定される大円墳の姫塚古墳（直径約60メートル）がみられる。これら山武郡域の後期の大型古墳はいずれもその現山武郡の北半部の旧武射郡域にみられるもので，その南半の旧山辺郡域には顕著な大型古墳はみられない。

これらのほか，天羽，夷隅，埴生，長柄の旧郡域にも後期の大型前方後円墳はみられないようである。

上総の後期の墳丘長60メートル級以上の前方後円墳の分布状況を旧郡単位に整理すると，市原3，海上6，望陀3，周淮8，武射8の計28基となる。なおさきにもふれたように望陀郡がさらに多かったことはほぼ確実であり，周淮，武射の二郡が異常に多いことも注目すべきであろう。一方墳丘規模別にみると，120メートル以上が1基，120メートル未満100メートル以上が5基，100メートル未満80メートル以上が6基，80メートル未満60メートル級以上が16基となり，墳丘長100メートル以上の大規模なものが6基もあり，それらがさきの周淮，武射の二郡と望陀郡にみられることは興味深い。

（6）武蔵地方

武蔵地方の後期の大型前方後円墳の分布にも，きわめて著しい地域的偏りがみられる。古墳時代の前半期には南武蔵に多くみられた大型前方後円墳がその後半期には逆に北武蔵に数多くみられるようになることは，多くの研究者の指摘するところであるが，その北武蔵（埼玉県域）の後期大型前方後円墳の分布も埼玉古墳群のある旧埼玉郡に集中しているのである。以下その状況を

概観してみよう。[11]

旧埼玉郡域では，行田市の埼玉古墳群に多くの後期の大型古墳がみられる。盟主級の古墳としては，辛亥銘鉄剣を出した5世紀末葉の埼玉稲荷山古墳（墳丘長125メートル），6世紀前半の埼玉二子山古墳（同135メートル），6世紀後半の鉄砲山古墳（同110メートル），6世紀後半ないし末葉と考えられる埼玉将軍山古墳（同約100メートル）が継続的に営まれ，また大円墳の丸墓山古墳（墳丘径約100メートル）も埼玉稲荷山古墳と埼玉二子山古墳の間の時期に入る可能性が大きいという。さらにこれらの盟主級の古墳以外にも中の山古墳（墳丘長80メートル），瓦塚古墳（同70メートル），奥の山古墳（同63メートル），愛宕山古墳（同53メートル），大人塚古墳（同60メートル前後か）などの前方後円墳が存在する。

埼玉古墳群以外にも旧埼玉郡内には後期の大型前方後円墳が多い。埼玉古墳群と同じ行田市域には，小見真観寺古墳（墳丘長112メートル），真名板高山古墳（同104メートル），若王子古墳（同103メートル），若小玉愛宕山古墳（同73メートル）などがある。また行田市の東北方羽生市には永明寺古墳（同78メートル）や毘沙門山古墳（同63メートル）があり，行田市の北の北埼玉郡南河原村には5世紀末の埴輪をともなったとやま古墳（同69メートル）がある。さらに南埼玉郡の菖蒲町には下栢間天王山古墳（同108メートル）がみられる。

つぎに埼玉郡以外の状況を旧郡単位にみていこう。旧賀美郡域では本庄市に二子塚古墳（墳丘長約60メートル）があり，旧児玉郡域に含まれる児玉郡児玉町には生野山銚子塚古墳（同58メートル），生野山16号墳（同58メートル），秋山諏訪山古墳（同58メートル）がある。旧大里郡の大里村にはとうかん山古墳（同74メートル）のほか後期の大円墳と想定されている甲山古墳（墳丘径約90ーメトル）が，旧比企郡の東松山市の柏崎古墳群には，天神山古墳（同約60メートル程度か）や帆立貝式の前方後円墳であるおくま山古墳（同62メートル）がある。さらに入間郡域では，坂戸市に胴山古墳（同63メートル）が，新座郡域には朝霞市柊塚古墳（同60メートル）がある。足立郡域では北足立郡吹上町三島神社古墳（同50メートル）があるが，60メートル級以上のものは知られていない。

以上が北武蔵（埼玉県）の状況であるが，南武蔵（東京都および一部神奈川県）ではどうであろうか。東京都では墳丘長が40メートルをこえるものとしては，豊島郡にあたる文京区に富士神社古墳（墳丘長45メートル）が，荏原郡にあたる大田区田園調布古墳群に浅間神社古墳（同60メートル程度か）と観音塚古墳（同43メートル）が，多摩郡にあたる狛江市には帆立貝式の前方後円墳の亀塚古墳（同48メートル）がみられるにすぎない。また神奈川県は，わずかに久良郡にあたる横浜市瀬戸ケ谷古墳（墳丘長41メートル）がみられるにすぎない。したがって南武蔵で墳丘長60メートルをこえる後期の前方後円墳としては，田園調布古墳群の浅間神社古墳の墳丘規模などにやや不確実なところのある例が一例あげうるにすぎないのである。

このように武蔵における後期の大型前方後円墳の分布は，北武蔵，それも旧埼玉郡域にいちじるしくかたよっていることが明白である。墳丘長60メートル級以上についてみると，旧郡単位で

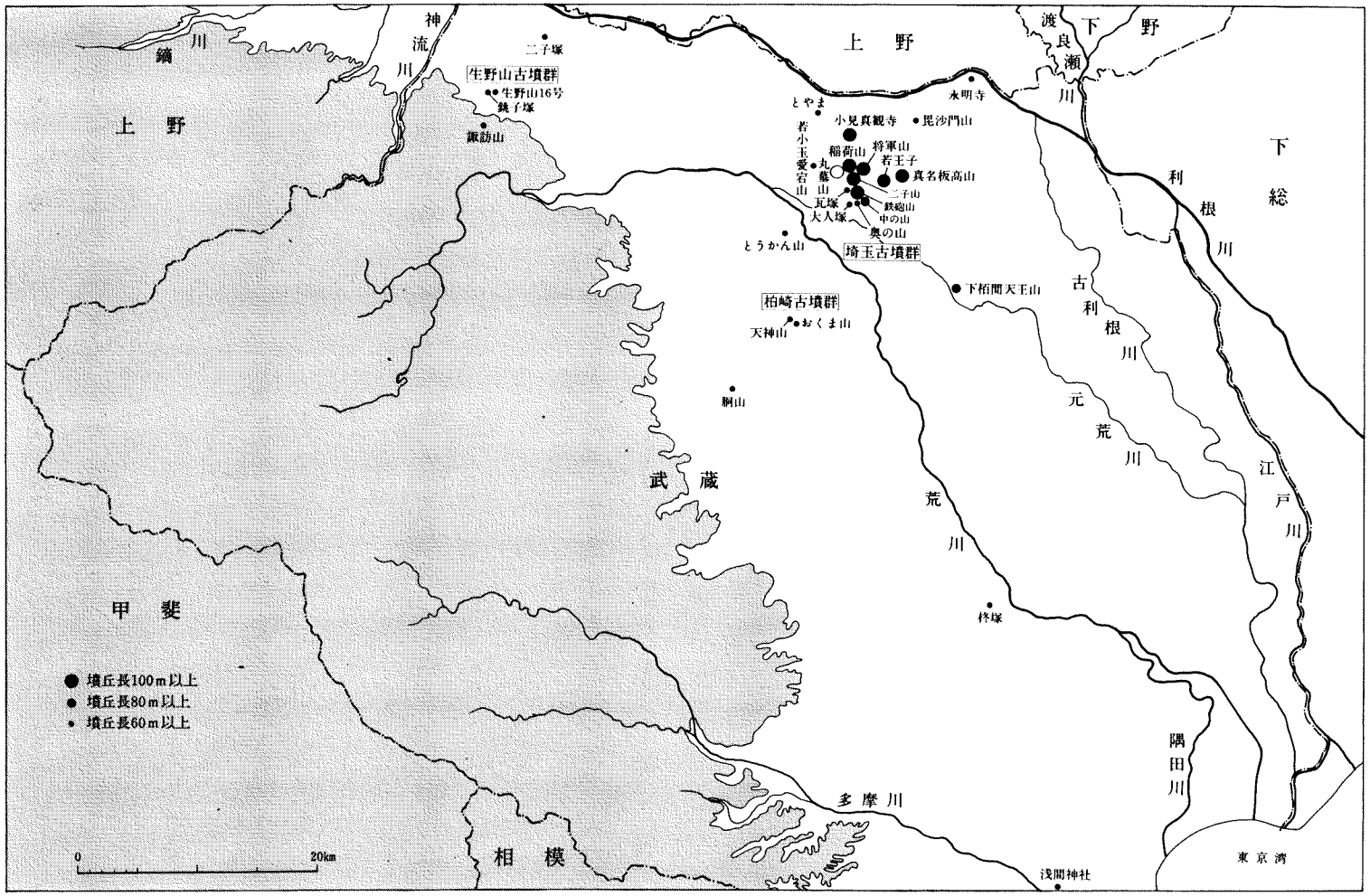

図5　武蔵地域における後期大型前方後円墳の分布

は埼玉16，賀美1，児玉3，大里1，比企2，入間1，新座1，荏原1の計26基となり，過半数の6割強が埼玉郡に集中する。さらに墳丘の規模別にみると，120メートル以上が2基，120メートル未満100メートル以上が6基，100メートル未満80メートル以上が1基，80メートル未満60メートル級以上が17となるが，そのうち80メートル以上の9基はすべて埼玉郡に集中するのである。なお，埼玉二子山古墳の墳丘長135メートルという規模は，後期初頭にさかのぼり一般の後期の前方後円墳とはやや性格を異にすると考えられる上野の七輿山古墳を別にすると，他の関東各地の後期大型前方後円墳をひときわ抜きんでた規模をもつものであることが注目される。

なお，南武蔵には墳形や規模の確認に問題ののこる田園調布古墳群の浅間神社古墳をのぞくと後期の大型前方後円墳はまったくみられず，その分布はきわめて希薄であるが，これはその西に位置する相模地方にも共通する。相模では平塚市塚越古墳（墳丘長約45メートル），秦野市二子山古墳（同約45メートル）が後期では最大級の前方後円墳であり，墳丘長60メートル級以上のものはまったく知られていない。南武蔵と相模地方は，後期の大型前方後円墳のあり方において他の関東諸地域とは異なった様相を示す地域としてとらえられよう。

註

（1） 群馬県編『上毛古墳総覧』（群馬県史蹟名勝天然紀念物調査報告書 第5輯，1938年）。

（2） 群馬県編『上毛古墳綜覧』（前掲），群馬県史編さん委員会編『群馬県史』資料編3，原始古代3（1981年），橋本博文「上野東部における首長墓の変遷」（『考古学研究』第26巻2号，1979年）。石塚久則「上毛野における前方後円墳の終焉」（金井塚良一編『前方後円墳の消滅』所収，新人物往来社，1990年）などによったほか，車崎正彦氏の教示をうけたところが少なくない。なお煩雑をさけ個々の古墳に関する文献については省略する。

（3） この大古墳群は現在一部をのぞきほとんどその原状をとどめないが，清水永二氏の貴重な記録によりそのありし日の状況をうかがうことができる。清水永二「郷土史料として古墳群の研究」（『新上野』第17巻，群馬県教育会，1936年）。

（4） 栃木県史編さん委員会編『栃木県史』資料編考古1・2（栃木県，1976・1979年），大橋泰夫・秋元陽光「栃木県南部の古墳時代後期の首長墓の動向—思川・田川水系を中心として—」（『栃木県考古学会誌』第9集，1988年），小森紀男・黒田理史編『横穴式石室の世界』（栃木県立しもつけ風土記の丘資料館企画展図録，1989年）などによったほか，小森紀男氏の教示をうけた。

（5） この地域の6世紀後半以降の大型古墳には，「基壇」とよばれる低く広いテラスからなる第1段をもつものが多い。地元の研究者は墳丘規模の表示に際してこの「基壇」部分を除くが，ここでは他地域と同一の基準で比較する必要からこれを墳丘第1段と認識し，墳丘長に含めている。

（6） 白石太一郎「常陸の後期・終末期古墳と風土記建評記事」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集，1991年）。

（7） 下総・上総地域については，杉山晋作・沼沢豊ほか『考古学からみた房総文化—古墳時代—』（千葉県文化財センター紀要4，千葉県文化財センター，1979年），平岡和夫『千葉県九十九里地域の古墳研究』（山武考古学研究所，1989年），沼沢　豊「地域の古墳—千葉」（『古墳時代の研究』11，1990年）などによったほか，田中新史，白井久美子，小沢洋氏らの教示をうけた。

（8） 川村　優・西垣晴次・三浦茂一編『角川日本地名大辞典』12　千葉県（角川書店，1984年）。

（9） 小沢　洋氏の教示による。

（10） 小沢　洋・光江　章「君津地方古墳資料集成（1）」（『研究紀要』1，君津郡市文化財センター，1983年）。

（11） 埼玉県編『埼玉県史』資料編2　原始・古代（埼玉県，1982年），坂本和俊「地域の古墳—東京・埼玉・神奈川—」（『古墳時代の研究』11，雄山閣，1990年），杉崎茂樹「北武蔵における前方後円墳

の消滅について」(金井塚良一編『前方後円墳の消滅』新人物往来社，1990年）などによった。

2.　後期の大型前方後円墳造営にみられる地域差

前節では，関東各地域の後期大型前方後円墳の分布状況を概観したが，ここではそのあり方の特異性を鮮明にするため，畿内や吉備などの西日本各地や中間地域の尾張，美濃などにおける後期の大型前方後円墳のあり方を瞥見してみよう。

畿内地方では，後期になるとあきらかに前方後円墳の規模が縮小し，その数も少なくなる。まず大和では，墳丘長318メートルの見瀬丸山古墳を除くとあとはいずれも140メートル未満のものばかりとなる。墳丘長が100メートルを越えるものとしては，高市郡明日香村の平田梅山古墳（現欽明陵，墳丘長140メートル），橿原市の鳥屋ミサンザイ古墳（現宣化陵，同140メートル），北葛城郡香芝町狐井城山古墳（同140メートル），天理市西乗鞍古墳（同128メートル），同別所大塚古墳（同125メートル），大和郡山市新木山古墳（同123メートル），天理市ウワナリ塚古墳（同110メートル），同石上大塚古墳(同110メートル)，北葛城郡河合町川合城山古墳(同109メートル)の10基にすぎない。これにつぐ墳丘長100メートル未満80メートル以上のものとしては天理市小墓古墳(墳丘長85メートル)，北葛城郡新庄町北花内古墳（現飯豊陵，同85メートル）の2基にすぎず，80メートル未満60メートル以上も天理市岩屋大塚古墳(同75メートル)，同東乗鞍古墳（同75メートル），桜井市珠城山2号墳（同75メートル），天理市御墓山古墳(同67メートル)，高市郡高取町市尾墓山古墳（同63メートル），天理市東大寺山25号墳（同62メートル），新庄町二塚古墳(同60メートル)，生駒郡平群町烏土塚古墳（同60メートル）の8基を数えるにすぎない。したがって大和の後期前方後円墳で墳丘長60メートル以上のものは全部合わせても18基にすぎない。(1)

畿内の大和以外の地域ではさらに少なくなる。河内でも墳丘長335メートルの松原市河内大塚古墳，同242メートルで5世紀末葉にさかのぼると思われる藤井寺市岡ミサンザイ古墳（現仲哀陵）を除くとあとはいずれも120メートル未満である。100メートル以上のものとしては羽曳野市から藤井寺市にまたがる古市古墳群のボケ山古墳（現仁賢陵，墳丘長120メートル），高屋城山（現安閑陵，同120メートル），白髪山古墳（現清寧陵，同115メートル）と南河内郡太子町の磯長谷古墳群の太子天王山古墳（現敏達陵，同113メートル）の合計6基。100メートル未満80メートル以上のものは古市古墳群の峯ケ塚古墳（同98メートル）と高屋八幡山古墳（同85メートル）の2基，80メートル未満60メートル以上のものは古市古墳群の鉢塚古墳（同60メートル）と稲荷塚古墳（同60メートル），八尾市の郡川西塚古墳（同60メートル），それに双円墳の南河内郡河南町金山古墳（同78メートル）を含めても4基にすぎない。河内全体では60メートル以上のものが12基ということになる。(2) なお和泉の地域では堺市の百舌鳥古墳群中の平井塚古墳が墳丘長58メートルで最大であり，60メートル以上のものはまったく知られていない。

摂津では，高槻市の三島野古墳群中の今城塚古墳（墳丘長190メートル）と蓍山古墳（同70メ

ートル）が知られるにすぎない。また山城では，6世紀前半の宇治市二子塚古墳（墳丘長120メートル）と嵯峨野古墳群の蛇塚古墳（同75メートル），天塚古墳（同70メートル），垂箕山古墳（現仲野親王墓，同65メートル），清水山古墳（同60メートル）があり，60メートル以上が合わせて5基存在する。(3)

このように，畿内の後期大型前方後円墳は関東の諸地域にくらべるときわめて少ない。60メートル以上のものは，大和20，河内12，和泉0，摂津2，山城5で，全部合わせても39基にすぎないのである。

こうした傾向は，畿内以西の西日本各地にも共通する。いま，中期に巨大な前方後円墳が造営された吉備を例にみてみると，墳丘長60メートル以上のものは，備前では岡山県赤磐郡赤坂町の鳥取上高塚古墳（墳丘長67メートル），備前市坂根の船山古墳（同60メートル）の2基，備中では総社市こうもり塚古墳（同約100メートル）1基，備後では広島県福山市駅家町の二子塚古墳（同68メートル）1基が知られるにすぎず，美作にはみられないのである。(4)

一方，畿内と関東の中間地域である東海地方ではどうであろうか。尾張では，墳丘長100メートル以上のものとしては名古屋市の断夫山古墳（墳丘長150メートル）があるが，これは畿内以外では最大の後期前方後円墳である。100メートル未満80メートル以上のものには春日井市味美二子山古墳（同95メートル），同味美白山神社古墳（同86メートル），名古屋市八幡山古墳（同82メートル），小幡長塚古墳（同81メートル），大須二子山古墳（同80メートル）の5基が，80メートル未満60メートル以上のものには春日井市味美春日山古墳（同74メートル），名古屋市白鳥古墳（同70メートル強），同白山神社古墳（同70メートル），同守山瓢箪塚古墳（同63メートル），同小幡茶臼塚古墳（同60メートル），江南市曽本二子山古墳（同60メートル）の6基がある。60メートル以上のものは合計12基ということになり，大和，河内をのぞく西日本各地よりははるかに多い。

これは美濃についても指摘できよう。美濃で現在のところ知られている後期の大型前方後円墳はいずれも80メートル未満60メートル以上のものである。揖斐郡大野町の野古墳群の城塚古墳（墳丘長75メートル）と南屋敷西古墳（同73メートル）が70メートルを越える以外はすべて60メートル前後であるが，可児市狐塚古墳（同63メートル），各務原市坂井狐塚古墳（同60メートル程度か），同野口南大塚古墳（同60メートル），岐阜市富塚古墳（同60メートル），大垣市東中道古墳（同約60メートル）の合わせて7基が知られている。(5)

このように関東地方以外の地域における分布状況と比較すると，関東各地における後期の大型前方後円墳の造営がいかに盛んに行われたかが明らかとなろう。いま一度墳丘長60メートル級以上のものを律令制の国単位で比較すると，関東の上野97，下野16，常陸38，下総11，上総28，武蔵26で計216に対し，畿内では大和20，河内12，和泉0，摂津2，山城5で計39，吉備では備前2，備中1，備後1，美作0，東海では尾張12，美濃7となる。畿内の大和，河内の数字にはあきらかに相当数の大王墓を含むものと考えられ，それらを差し引いて考えると畿内を含む西日本

表1　関東地方の後期大型前方後円墳

(墳丘規模単位：メートル)

墳丘規模	60～79	80～99	100～119	120以上	計
上　野	64	17	15	1	97
下　野	8	5	2	1	16
常　陸	24	12	2	0	38
下　総	9	1	1	0	11
上　総	16	6	5	1	28
安　房	0	0	0	0	0
武　蔵	17	1	6	2	26
相　模	0	0	0	0	0
合　計	138	42	31	5	216

表2　畿内地方の後期大型前方後円墳

(墳丘規模単位：メートル)

墳丘規模	60～79	80～99	100～139	140以上	計
大　和	8	2	6	4	20
河　内	4	2	4	2	12
和　泉	0	0	0	0	0
摂　津	1	0	0	1	2
山　城	4	0	1	0	5
合　計	17	4	11	7	39

諸地域における後期の大型前方後円墳の数がそれほど多くないことは明白で，それに対して相模をのぞく関東諸地域では異常ともいえるほど多くの前方後円墳が営まれたことが知られよう。また東海の尾張，美濃については後期の前方後円墳の造営数においても畿内を含む西日本と関東との中間的な地域として把握できる。ただ尾張・美濃も関東各地域にくらべるとその分布がなお希薄であることは明瞭であろう。

註

(1)　前園実知雄「大和における後期前方後円墳の規模と分布について」(『橿原考古学研究所論集』第4，吉川弘文館，1979年) ほか。

(2)　天野末喜「地域の古墳―大阪―」(『古墳時代の研究』10，雄山閣，1990年)。

(3)　平良泰久「各地の古墳―山城―」(『古墳時代の研究』10，雄山閣，1990年)。

(4)　近藤義郎編『前方後円墳集成』中国・四国編 (山川出版社，1990年) によった。

(5)　東海埋蔵文化財研究会資料『断夫山古墳とその時代』(愛知考古学談話会刊，1989年) によるほか，赤塚次郎，中井正幸両氏の教示をうけた。

3. 関東の後期大型前方後円墳の被葬者像

以上概観したところからもあきらかなように，古墳時代後期の関東地方では，畿内を含む西日本とは比較にならない数多くの大型前方後円墳が造営された。そのことの歴史的意味を考察する必要があるが，ここではまずその前提としてこれら関東地方の後期大型前方後円墳の被葬者像をどのように想定することができるかを検討してみよう。

第1節でみたように，同じ関東地方といっても後期の大型前方後円墳のあり方は地域によって大きく異なっている。大きく分けると，上野に典型的にみられるように，あまりその規模に差のない大型前方後円墳が各地域にひろく万遍なく分布している「分散型」と，下野や武蔵に典型的にみられるように，一国のうち特定の郡ないし特定の古墳群の周辺に特に大規模なものが集まっている「集中型」に分けられよう。「分散型」の場合も常陸の大部分の地域や下総のように前方後円墳が営まれる単位が律令制下の郡程度のもの，上野のようにその単位が郡よりもさらに狭い範囲であるもの，さらに上総のように『国造本紀』にみられる国造の国単位に集中する東京湾岸地域と律令期の郡域内でいくつかのグループに分散する武射郡のような例が併存するものなど地域によってそれぞれ異なり，その様相はきわめて複雑である。

「集中型」の下野や武蔵の場合は，多くの研究者が想定しているように，都賀郡域や埼玉郡域に営まれる墳丘長100メートル以上の前方後円墳の被葬者を下毛野国造や武蔵国造のような広域の領域支配者と考えることも不可能ではない。この場合，他の諸郡にみられる60メートル程度，あるいはそれ以下の前方後円墳の被葬者は，そうした国造クラスの支配者の配下に組み込まれた郡域程度の地域首長ということになろう。しかしこうした前方後円墳の被葬者観を上野など「分散型」の地域に適用することは到底できない。

上野の場合，群馬，勢多，佐位，新田といった中心部の多くの郡では郡域内に3ないし4群の大型前方後円墳からなる首長墓系列がみとめられるのであり，145メートルの墳丘規模をもつ後期初頭の七輿山古墳を別にすると特に隔絶した規模の大前方後円墳やその系列を見いだすことはできない。筆者はこの七輿山古墳を高崎市浅間山古墳（墳丘長170メートル），太田市別所茶臼山古墳（同170メートル），藤岡市白石稲荷山古墳（同約150メートル），太田市太田天神山古墳（同210メートル）につづく，最後の上毛野連合[1]の盟主墓と考えている。その首長連合の範囲はあるいは上野を東西に二分する程度のもので，浅間山，白石稲荷山，七輿山古墳は西上野連合の大首長墓であったかも知れないが，いずれにしてもこの七輿山を最後に上野では，同時期の他の古墳とは隔絶した規模をもつ古墳はみられなくなり，最大でも墳丘長が110メートル程度の前方後円墳が上野各地分散して営まれるようになるのである。これはまさに上毛野連合ないし西上野連合の解体に対応するものであり，6世紀初めから7世紀初めにかけての約1世紀の間，律令制下の郡域よりはるかに小さな範囲ごとに，その没後60メートルから100メートル前後の前方後円墳を

造営するような首長たちが上野の各地に割拠するのである。それらのなかでは，西部では前橋市の朝倉古墳群をのこした勢力や東部では東矢島古墳群をのこした勢力が優勢であったようにもみえるが，その支配領域がのちの郡域をさらに二，三分した範囲を越えるものでなかったことは，同郡域内にほかにも有力な首長墓の系列が認められることからも確かであろう。

したがって6世紀代の上野に，たとえば「上毛野国造」のような上野全域に何らかの広域的な支配権を及ぼすような支配組織の存在は認め難いのである。むしろそうした広域的な支配の成立は，後期の前方後円墳の造営が一斉に停止され，上野地方でただ一カ所前橋市総社古墳群だけに大型の方墳が造営されるようになる7世紀初めにこそ求めるべきであるということになる。

このように検討の対象を「集中型」の下野や武蔵に求めるか，「分散型」の上野に求めるかによって，同じ100メートル級の後期前方後円墳の被葬者像が下毛野や武蔵といった後の律令制下の国に匹敵する広域の領域支配者になったり，のちの郡を二，三分した程度の小地域の領域支配者になったりする。相互に矛盾する二つの想定を総合的に理解することはなかなか困難で，現在の筆者にはできないが，これを解決する鍵の一つは，こうした東国の後期大型前方後円墳の被葬者をすべて領域的支配者とする考え方を再検討することにあるのではなかろうか。

さきに常陸の後期大型前方後円墳のあり方を検討した際に指摘したことであるが，たとえば，常陸の茨城郡域の霞ヶ浦（西浦）北部沿岸の現玉里村付近の小地域に集中して営まれた多数の前方後円墳の被葬者を，すべて一定の範囲の領域支配者ないし地域首長と認識することはむつかしい。むしろ彼らを交通上の重要性からこの付近に数多く置かれたと推測される名代や子代などの部の地方管掌者としての性格をも持つものととらえる方がより合理的である。(2) 上野各地の後期大型前方後円墳の被葬者についても，単なる小地域の領域支配者ないし小地域首長とのみとらえるのではなくて，そうした部の管掌者としての性格をも合わせもつ在地首長ととらえることによって，その膨大な造営数についても説明が可能になるのである。さらにこれら東国に置かれた部を中央で管掌するのが，畿内政権を構成する畿内の複数の政治勢力であり，それらがそれぞれに東国の特定勢力との関係を求めたとすれば，その管理システムはきわめて複雑なものとなっていたと想定される。これまた部の地方管掌者が必要以上に多くなった理由ではなかろうか。

一方，武蔵や下野，さらに上総などの後期の有力な前方後円墳の被葬者が武蔵や下毛野，あるいは上海上，馬来田，須恵，武社などの国造の前身勢力である可能性は大きいが，6世紀の時点でそうした広域の領域支配者としての国造制が成立していたかどうかは，はなはだ疑わしい。6世紀の東国における国造制の成立は，すでに述べた上野における後期大型前方後円墳の分布状況からも疑問が大きい。また常陸や下総における後期大型前方後円墳の分布のあり方は，国造制の国よりもむしろ後の評（郡）の領域により整合するようである。常陸では，郡内に複数の有力古墳群の見いだせる茨城，那珂両郡をのぞくと，多珂，久慈，新治，白壁，筑波，河内，信太，鹿島の各郡に一群ずつ後期の大型前方後円墳を含む顕著な古墳群があり，有力な在地首長勢力の存在が想定される。(3) また下総でも下海上といった国造の国単位ではなく，その支配領域内に含まれ

ていたと思われる海上，匝瑳，香取の各郡単位に後期の大型前方後円墳がみられるのである。印旛の国造の支配領域内でも後の印旛，埴生両郡にそれぞれ公津原古墳群，竜角寺古墳群がみられるのも同様であろう。一方上総では，菊間，上海上，馬来田，須恵，武社など『国造本紀』にみられる国造の国ごとに有力古墳群がみられるが，それらはほとんど律令制下の郡と共通するものであり，それらの古墳群がのちの国造，さらに評（郡）司層につながる在地首長層と関係するものであることは確かであろうが，6世紀の時点で国造制が成立していたことの根拠にはならない。

西日本の国造がほとんどその本拠地の地名を氏の名とするのに対し，常陸や総など南関東一帯の国造が「某部直」や「某舎人直」を名のり，部名もしくは舎人の名を負うものが多いことは多くの古代史研究者が指摘しているところである。(4) このことは，彼ら南関東の国造が，本来領域支配者としての国造であるよりもまえに，まず部の地方管掌者であったことを如実に物語るものといえよう。さらにのこされた問題は多いが，関東地方の後期大型前方後円墳のあり方は，その被葬者の性格を単なる領域支配者として理解するのではなく，畿内王権の設置した部の地方管掌者の性格をも合わせもつものと理解してはじめてその膨大な造営数についても説明が可能になるのである。

註

（1） 白石太一郎「日本古墳文化論」（『講座日本歴史』1，東京大学出版会，1984年）178～182頁。
（2） 白石太一郎「常陸の後期・終末期古墳と風土記建評記事」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集，1991年）。
（3） 白石太一郎「常陸の後期・終末期古墳と風土記建評記事」（前掲）。
（4） 鎌田元一「大王による国土の統一」（『王権をめぐる戦い』 古代の日本6，中央公論社，1986年）123～126頁。

4. 後期大型前方後円墳からみた畿内と東国

後期の大型前方後円墳の造営数には関東地方とその他の地域との間に著しい違いがみられる。それは単に造営数だけではない。畿内地方では，あきらかに全列島的な首長連合の頂点に立つ大王墓と考えられる河内大塚古墳，見瀬丸山古墳，岡ミサンザイ古墳，今城塚古墳など墳丘長200メートル以上の前方後円墳や，大王墓であるかどうか確定は困難であるが，狐井城山古墳，鳥屋ミサンザイ古墳，平田梅山古墳など大王墓級のものを合わせた7基をのぞくと，あとはいずれも墳丘長130メートル未満のものである。しかもこの130メートル未満100メートル以上の前方後円墳は畿内全域でもわずか11基しかみられないのである。畿内では一部の大王墓や大王家とともに畿内王権を構成していた最有力豪族の族長墓と判断せざるをえないこの130メートル未満100メートル以上の墳丘長の後期大型前方後円墳は，関東では，上野16，下野3，常陸2，下総1，上総6，武蔵7の計35基にも達するのである。このことは，6世紀においては，その造営基準自体にも西日本と関東との間に大きな差異があったことを認めざるをえない。すなわち畿内の一部の大

王やこれにつぐ最有力豪族の族長層の営む前方後円墳よりさらに大規模な前方後円墳が，関東では多数造営されているのである。

それでは，前方後円墳の造営に際し，このあきらかに畿内を含む西日本とは異なる基準が適用された地域はいかなる範囲に及ぶのであろうか。さきに畿内と関東の中間地域としてたまたま検討した濃尾地域のとくに尾張は，関東地方ほどではないとしても，後期大型前方後円墳の多い地域として位置づけることが可能である。しかしここでも，60メートル以上の後期前方後円墳は12基もみられるものの，100メートル以上になると断夫山古墳1基しかみられないのである。6世紀前半を中心に断夫山古墳という畿内以外では最大の後期前方後円墳をはじめとする比較的大規模な前方後円墳が他の地域などに比較して数多く営まれるのは，この地域が継体大王の擁立に重要な役割をはたした勢力の本拠地という特別の理由によるものであることはあきらかであろう。このことは，この地域の後期の大型前方後円墳の多くが6世紀前半から中葉にかけてのもので，関東各地では大型前方後円墳の造営がピークに達する6世紀後半になると，逆にその数がきわめて少なくなることからも裏付けられよう。[(1)] 一方美濃地方についても，後期の大型前方後円墳のうち墳丘長が70メートルをこえるものは野古墳群の2基にすぎず，あとはいずれも60メートル程度のものばかりで，特に西日本と異なる基準が適用された地域と考える必要はなかろう。

5世紀前半の尾張を特殊な例外と考えると，関東以西の東日本地域は，後期の大型前方後円墳の分布が特にいちじるしいわけではない。したがって6世紀において，他の地域とはあきらかに異なる基準にもとづいて，数多くの大型前方後円墳が造営されたのは，まさに相模をのぞく関東地方にのみ限られるのである。

このように6世紀の関東地方では，それ以外の諸地域とはまったく別個の基準にもとづいて大型前方後円墳の造営がおこなわれた。都出比呂志は前方後円墳を頂点とした各種の古墳の墳形，規模によって，日本列島各地の首長間に成立していた身分秩序を表現するシステムを「前方後円墳体制」と呼び，そこにはあきらかに国家段階の特徴を認めることが可能であるとしている。[(2)] その国家論の評価についてはここではふれないが，こうした「前方後円墳体制」なるシステムが存在し機能したとすれば，それは本来的に列島全域同一の基準にもとづくものでなければならない。ところがここではそうした一般的基準とは異なる，関東にのみ適用される特殊な基準が設けられ，適用されたことになるのである。

こうした，一般とは異なる，関東にのみ適用される基準が設けられ，適用されたのはどのような理由によるものであろうか。その理由としては，もう西日本などではあまり意味を持たなくなった古墳による身分秩序の表示が，関東ではまだ意味を持ち，民衆の支配にも一定の有効性を発揮しえたことなども考えられよう。しかしこの理由のみでは，その範囲がなぜ関東に限定されるのかを説明することが困難となる。関東以外にもそうした古い支配体制が有効であった地域は存在したはずであるからである。この地域の支配体制の後進性のみでその理由が説明できないとすれば，結論は単純ではあるが，やはり関東地方が畿内政権の経済的・軍事的基盤としてきわめて

重要な地域であったためと考えざるをえないのではなかろうか。これらの大型前方後円墳の被葬者が，畿内の王権が関東各地に設置した名代，子代などの部の地方管掌者としての性格をも持つものであろうとするさきの想定が正しいとすれば，多数の大型前方後円墳の造営は何よりもまず関東地方が畿内王権の経済的・軍事的基盤としてきわめて重要な地域であったことを示すものにほかならないと思われるのである。そしてまた，関東各地における異常ともみえるほどの後期大型前方後円墳の盛んな造営は，この畿内にとって重要な地域にたいする畿内王権の支配システムの構造的特質によるものと思われるのである。

かつて甘粕　健は，千葉県竜角寺古墳群における前方後円墳の平面形態の分析にもとづき，同古墳群をはじめ関東各地の後期の前方後円墳のなかに古市古墳群の安閑陵（高屋城山古墳）など畿内の特定の大王墓と共通の築造企画をもつものがあることを指摘し，その背景に，名代・子代・舎人など特定の大王ないし皇族に対する地方族長の服属を媒介として設定された支配システムの存在を想定した。(3) この畿内政権が本来畿内豪族の連合政権であり，その全国支配が連合政権を構成する個々の豪族に対する地方族長の服属という形をとって実現したものであり，関東におけるさまざまな型式の前方後円墳の併存をこうした畿内政権の構造的な特質と関連させて理解しようとした視点は，いまここで検討している畿内王権の関東地方にたいする支配秩序の特質を考える場合にも有効であろう。

関東の後期大型前方後円墳の形態分類についてここで詳しくふれる余裕はないが，たとえば，上野の旧群馬郡とその東西の那波・片岡両郡にかけての，現前橋市から高崎市にかけての径10キロほどの範囲で，6世紀後半から7世紀初頭のごくかぎられた期間に造営された，いずれも墳丘長100メートル前後の総社二子山古墳，綿貫観音山古墳，天川二子山古墳，八幡観音塚古墳を比較するとあきらかに平面・立面形態に大きな相違がみられる（図6）。同一地域のほぼ同時期の古墳でありながら，異なる築造企画にもとづいて造営されたものであることは一目瞭然である。そしてこのうち綿貫観音山古墳については鳥屋ミサンザイ古墳，天川二子塚古墳については別所大塚古墳，八幡観音塚古墳については西乗鞍古墳などそれぞれ畿内の6世紀の特定の大型前方後円墳との間に墳丘形態上の共通点を見いだすことも不可能ではない。これら関東の後期大型前方後円墳は，おそらく畿内などの特定の前方後円墳と共通の築造企画にもとづいて構築されたものなのであろう。そしてそのことは東国の族長がそれぞれ畿内政権を構成している大王家を含む特定の豪族との提携関係を前提に，その技術的援助をうけて特定の形態の前方後円墳を造営した可能性が大きいことを窺わせるのである。

筆者はさきに，長野県飯田市周辺の天竜川沿いの南北10キロ足らずの小地域に，墳丘長40～80メートル級の後期前方後円墳が20基以上も構築されることについて，やはり当時の畿内政権による東国支配の特異な構造と関連させて考えたことがある。すなわち，畿内政権を構成する個々の豪族がそれぞれ独自に東国支配のルートを確保するため，東国支配の大動脈である東山道の最も重要な中継地である下伊那地方にきそって拠点を設けようとして在地勢力と提携した結果にほか

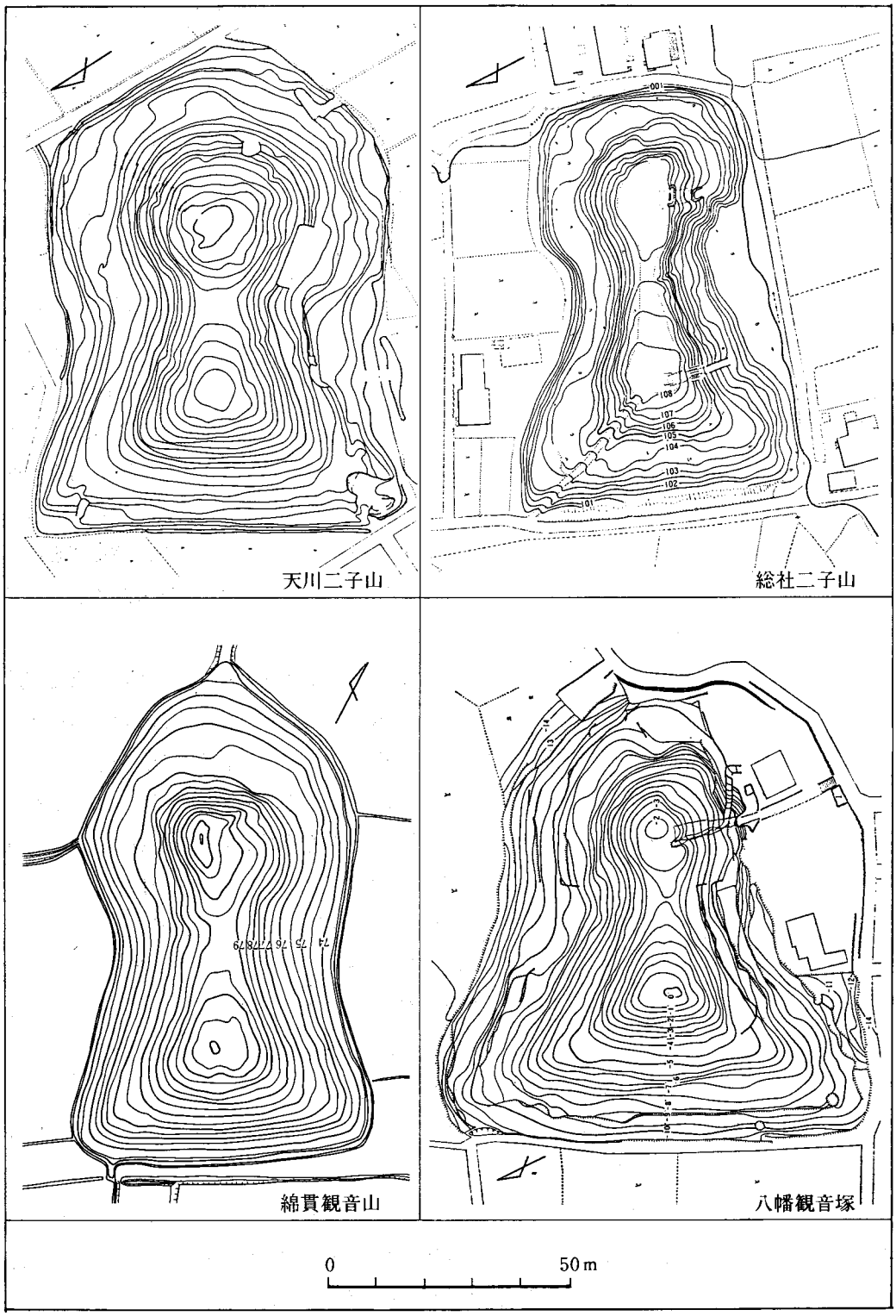

図6　上野西部の後期大型前方後円墳

ならないと理解した[4]。また，常陸の霞ケ浦（西浦）北部における異常ともいえる後期大型前方後円墳の集中についても，この地の占める交通上の重要性からやはり同じような理解が可能であろうとした[5]。こうした理解はさきにのべたように，これらの前方後円墳の被葬者を単なる領域支配者としての在地首長としてではなく，畿内の特定勢力と結びついた畿内政権の東国支配の出先管理者としての性格をももつ在地首長ととらえることを前提としていることはいうまでもない。

こうした理解は単に伊那谷や霞ケ浦北部沿岸だけではなく，上野地域や上総の武射地方などに多数の後期大型前方後円墳をのこした諸勢力についても適用できよう。関東地方が畿内政権の経済的・軍事的基盤として重要であったこととともに，そうした豪族連合としての畿内政権の東国支配の構造的特質が，かくも多くの後期大型前方後円墳を輩出させた最大の理由と考えるのである。

註

（1） 赤塚次郎「断夫山古墳をめぐる諸問題」（東海埋蔵文化財研究会資料『断夫山古墳とその時代』愛知考古学談話会刊，1989年）8～17頁。

（2） 都出比呂志「日本古代の国家形成過程―前方後円墳体制の提唱―」（『日本史研究』338号，1990年）。

（3） 甘粕　健「前方後円墳の性格についての一考察」（考古学研究会十周年記念論文集『日本考古学の諸問題』1964年）173～202頁。

（4） 白石太一郎「伊那谷の横穴式石室」一・二（『信濃』第40巻第7・8号，1988年）。

（5） 白石太一郎「常陸の後期・終末期古墳と風土記建評記事」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集，1991年）131～161頁。

む す び

小論は，古墳時代の後期すなわち6世紀において，関東地方が畿内を含む日本列島の他の地域とはやや異なる原理ないし基準にもとづいて前方後円墳が造営された特異な地域であることを指摘し，あわせてそのことのもつ意味について若干の考察を試みたものである。

古代の東国が，畿内政権の政治的・経済的基礎をなした地域であることは，早くから文献史学の研究者によって指摘されてきたところである。後期の大型前方後円墳の造営のあり方を概観すると，美濃・尾張以東の広大な東国のなかでも，特に今日関東地方と呼ばれる地域，厳密には関東のうち相模，安房をのぞく上野，下野，常陸，下総，上総，武蔵の諸地域が驚くほど多くの後期大型前方後円墳が造営された特異な地域であったことが，認識できるのである。そしてまたこの時期のこの地域では，畿内を含む他の多くの地域とはあきらかに異なる基準にもとづいて大型前方後円墳，ひいては古墳の造営が行われた特異な地域であったことが知られるのである。

このように関東地方にかぎって，他の地域とはあきらかに異なる基準にもとづいて，数多くの大型前方後円墳が6世紀に造営された理由は，東国のなかでも特にこの地域が，畿内政権にとって経済的・軍事的に重要な地域であったこと，さらに畿内政権の東国支配の形態が，畿内豪族の

連合体としての畿内政権の構造的特質から，畿内有力豪族がそれぞれにこの地の在地勢力と結びつき，支配の拠点を求めたことによるものではなかろうか。またそのことと関連して，これら関東の後期大型前方後円墳の被葬者は，領域支配者としての地域首長であるとともに，畿内王権がこの地域に数多く設置した名代・子代などの部や舎人の現地管掌者としての性格をも合わせもつものであったと思われるのである。

こうした古代国家形成期において関東地方が占めた特異な位置とその役割については，筆者の努力不足からここでは取り上げなかった墳丘長60メートル未満の中型・小型前方後円墳やその他の古墳のあり方を含めて総合的に考察することによってより鮮明にできることはいうまでもない。今後も大方の教示をえて，検討を続けていきたい。さらにここで取り上げた60メートル以上の前方後円墳についても，多くの遺漏や年代想定の誤りをおかしていることと思われる。この点についても叱正をいただければ幸いである。

小論をまとめるに際しては，関東各地の多くの研究者のご教示をえた。特に車崎正彦，右島和夫，小森紀男，塩谷　修，田中広明，小沢　洋，白井久美子らの諸氏の学恩には心から感謝したい。

なお，小論はすでに3年ほど前に一応稿をなしていたものである。ただその後の知見や資料の増加，さらに筆者の考え方の変化にもとずいて大幅に加筆・削除・訂正を行った。そのため論旨に一貫性を欠く結果になった面も否定できない。本格的に書き改めるべきであったが時間的制約からそれもはたせなかった。読者のご寛恕をお願いするものである。

（国立歴史民俗博物館考古研究部）

Large Keyhole-shaped Mounded Tomb in the Later *Kofun* Period in *Kantô* District

SHIRAISHI Taichirô

When we compare the numbers of large, keyhole-shaped mounded tomb with a mound length of over 60m, built in various areas in the Japanese Archipelago in the 6th century, that is in the Later *Kofun* Period, we see that the *Kantô* District contains the largest number by far. Classified according to the statutory provinces in the *Kantô* District, there are 97 in *Kôzuke*, 16 in *Shimotsuke*, 38 in *Hitachi*, 11 in *Shimousa*, 28 in *Kazusa*, 26 in *Musashi*, and none in *Sagami*, a total of 216 tumuli. Even in the *Kinai* District, which includes *Daiō* 大王, tombs, there are 20 in *Yamato*, 12 in *Kawachi*, none in *Izumi*, 2 in *Settsu*, and 5 in *Yamashiro*, a total of only 39 tumuli. In the *Kibi* District, there are 2 in *Bizen*, 1 in *Bitchû*, 1 in *Bingo*, and none in *Mimasaka*, a total of only 4. In the *Tôkai* District, there are 12 in *Owari*, and 7 in *Mino*. It is thought that the large number in *Owari* is due to special political reasons, that the power in this region played an important role in supporting the *Keitai Daiō* 継体大王 in this accession to the throne. Therefore, it is obvious that only the *Kantō* District was a special region with regard to the construction of later keyhole-shaped mounded tomb in eastern Japan.

Generally, keyhole-shaped mounded tomb have been considered to have been established by the chiefs of various regions which joined the political association centering around the power in the *Kinai* District, in accordance with the status order in this association. In the *Kantô* District of the 6th century, however, obviously a standard different to that of other regions was applied to the construction of keyhole-shaped mounded tomb.

Furthermore, from the concentration rate of large keyhole-shaped mounded tomb in small areas, it must be taken that the persons buried were not only regional chiefs who simply ruled their local territory, but who also had positions as the regional controllers of *Be* 部 groups, such as *Koshiro* 子代 and *Nashiro* 名代, or *Toneri* 舎人, who were positioned in large numbers in this region by the *Kinai* Government. The reasons many large keyhole-shaped mounded tomb were constructed under a standard which was different from other regions thought to be as follows: this region was extremely important as an economic and military base supporting the *Kinai* Government; various powerful families which formed the *Kinai* Government in association wished to tie up with the local powers in tke *Kantô* District to acquire bases of control. So the above circumstances may be considered to have come about from the structural features of the *Kinai* Government.